

『家族と刑法——家庭は犯罪の温床か？』

(N.K.・公務員・50代)

従来、刑法分野から家族関係について語られることはそれほど多くはなかった。本書は、そうした課題を正面から取り上げていて、とても関心を持った。「家族は犯罪の温床か？」という刺激的なタイトルが付されているが、それだけ家族内で何が起きているのかが外部から見えにくい、ということの意味している。私は本書を児童相談所の職員と一緒に読み、気づいたことを語り合うことで新たな発見もあった。それぞれの規定の背後にある保護法益が何なのかということについて深く考える良い機会となった。『書齋の窓』の連載が基になっていることもあり、一つの回が端的にまとまっているので、こま切れの時間を活用して読むことができた。本書の利点はまず、比較法的視点(主にドイツ語圏)からの検討がなされていること。立法論を検討するにあたって、すでにある立法例は参考になる。また石綿はる美准教授による民法の視点からのコメントが付されていることも本書の利点だ。家庭内で生じる問題は刑事法の問題、民事法の問題と割り切れるものではなく、双方の視点が欠かせない。刑事法の介入が家族内の問題解決にどのような役割を果たすのかを改めて考えさせられる。